



名古屋市蓬左文庫 HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

# 尾張藩と尾張徳川家の編纂事業

# I 初代藩主義直の編纂事業

四月九日~五月十一日 五月十四日~六月十二日

### II 藩主と藩士の記録

七月十六日~八月十七日 八月二十日~九月十八日

物が数多く伝えられています。 江戸時代始めからの尾張藩や尾張徳川家による編纂書や、編纂に際し、収集された書江戸時代始めからの尾張藩や尾張徳川家による編纂書や、編纂所まで、当文庫には、

書を展示し、尾張藩の文化政策とその影響の一端を紹介します。平成六年度の展示室は、「尾張藩と尾張徳川家の編纂事業」をテーマに、こうした蔵

## 1、初代藩主義直の編纂事業

程度のものも含まれますが、編纂の中心となったテーマ の編纂事業は、 歳月が費やされています。 じめから正保三年(一六四六)の完成まで、二○年余の とくに「神祇宝典」九巻一〇冊、「類聚日本紀」一七四巻 とそれに連なる一族の系譜、神道研究、 種余をかぞえます。このなかには、書物からの抜き書き は編纂を主導したとされてきた書物は下記のように、十 いえます。 七〇冊は、編纂のための調査が開始された寛永年間のは 義直にとっては、 「敬公御撰述」として初代藩主義直が自ら編し、また 彼の学問と文教政策の集大成であったと 父でもある徳川家康の年譜、 義直四七才にして完成したこ 歴史研究です。 伝記

面を最も受け継いだ男子といわれる性格が培われていって気質に加え、こうした環境のもとに、家康の文化的側の気質に加え、こうした環境のもとに、家康の文化的側の気質に加え、こうした環境のもとには神、仏、もとで過ごしています。当時、家康のもとには神、仏、信等ジャンルを問わず優れた学者が招かれており、生来儒等ジャンルを問わず優れた学者が招かれており、生来儒等ジャンルを問わず優れた学者が招かれており、生来の気質に加え、こうした。 慶長五年 (一六○○)、関ケ原合戦の年に、家康の九男

た林羅山(一五八三~一六五七)は、義直の学問の師でた林羅山(一五八三~一六五七)は、義直の学問の師であり、終生その学問と政策に影響をあたえました。さらあり、終生その学問と政策に影響を与えたようです。の後の義直の歴史研究に影響を与えたようです。のは、堀杏庵(一五八五~一六四二)といわれ、編纂ののは、堀杏庵(一五八五~一六四二)といわれ、編纂ののは、堀杏庵(一五八五~一六四二)といわれ、編纂ののは、堀杏庵(一五八五~一六四二)といわれ、編纂のれた優れた学者で、すでに広島の浅野家に仕えていたのた、義直が舅でもある浅野長晨に懇望して尾張に招いたを、義直が舅でもある浅野長晨に懇望して尾張に招いたを、義直が舅でもある浅野長晨に懇望して尾張に招いたを、義直が舅でもある浅野長晨に懇望して尾張に招いたものでした。

継いだ編纂事業においても優れた成果を生み出していまれました。義直の編纂事業が、優れた資料に基づいた実証ました。義直の編纂事業が、優れた資料に基づいた実証編纂事業に代表される学問振興の精神は、後の歴代藩主編纂事業に代表される学問振興の精神は、後の歴代藩主編纂事業は、こうした背景の結果として実行さ

案き、その出発点に位置付けることができます。案き、その出発点に位置付けることができます。なくに、杏庵門下をはじめ編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂事業の担い手へと受秀な学者が育ち、さらに次代の編纂を表している。

### 義直の主要編纂物

	0									
類聚日本紀	初学文宗	神祇宝典	(中臣祓抄)	軍證志	軍書萃言	軍書合鑑	成功記)	御年譜	御系図	書名
正保三年一一月序		正保三年二月序						正保三年四月序	正保三年ころ	成立年代
纂したもの。 供の事績を六国史をもとに編 神代から光孝天皇にいたる歴	での心得の書。	き神社の祭神を検証したもの伊勢神宮をはじめ、由緒正し	神道書「中臣祓」の注釈書。	上から批判したもの。 古代からの著名な合戦を軍法	兵書の抜粋。	軍法書。 軍法書。	政治的記録中心。家康の事績録。主に、軍事、	での家康の編年事績録。 天文一一年から慶長一五年ま	たる徳川家の系図。 清和天皇から家康の子女にい	内容

、 、 落主と 藩士の記録

に命じています。 藩士の系譜集編纂を堀杏庵の子堀貞高(一六二四~九五)藩士の系譜集編纂を堀杏庵の子堀貞高(一六二四~九五)また、幕府の「寛永諸家系図伝」編纂に刺激され、尾張表直は、家康の年譜と徳川家の系図を編纂しました。

認する意図が含まれていたことは確かでしょう。 で、自分の家系を権威づける必要があったからです。 で、自分の家系を権威づける必要があったからです。 後はいえ、家康の事績を顕彰し、それにつながる徳川家 とはいえ、家康の事績を顕彰し、それにつながる徳川家 とばいえ、家康の事績を顕彰し、それにつながる徳川家 と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配がすでに確立していた と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配がすでに確立していた と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配の正当性を確 と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配の正当性を確 と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配の正当性を確 と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配の正当性を確 と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配の正当性を確 と尾張徳川家を含めた、徳川家による支配の正当性を確

江戸時代の社会は、家を単位として成立しています。江戸時代の社会は、家を単位として成立しています。こうした体制において、歴代藩主と一族の記録、その藩家に忠誠をつくすべき家臣の記録は、かれら録、その藩家に忠誠をつくすべき家臣の記録は、かれらの支配を正当化し、結束を強化するうえで重要な意味をもっていました。

ですから、一歩先んじていたといえます。 一八世紀後半以降、江戸時代後期は、江戸時代初期に 一八世紀後半以降、江戸時代後期は、江戸時代初期に 一八世紀後半以降、江戸時代後期は、江戸時代初期に 一八世紀後半以降、江戸時代後期は、江戸時代初期に 一八世紀後半以降、江戸時代後期は、江戸時代初期に

宝暦二年(一七五二)からは、藩主一族の公務を中心に士名寄」の編纂が始まったのは、寛政七年ころからです。藩士各家より提出させた系譜、勤書を編纂した「藩の孫松平君山によって「士林沂洄」として完成していまの孫松平君山によって「士林沂洄」として完成していまの孫松平君山により堀貞高が編纂に着手し、草稿のまま中義直の命により堀貞高が編纂に着手し、草稿のまま中

をする。 については、寛政二年、義直が編纂した形式を踏襲して 九代宗睦が計画、十代斉朝の代に完成しています。一方、 京譜の提出を指示しました。寛政二年には、御三家とそ の一族、御三卿に対しても系譜の提出が指示されています。 で成、第世に対しても系譜の提出が指示されています。 では、第世に対しても系譜の提出が指示されています。 では、第世に対しても系譜の提出が指示されています。 では、第三の編纂が始まりました。 意政二年には、御三家とその一族、御三卿に対しても系譜の提出が指示されています。 では、第三郎に対しても系譜の提出が指示されています。 では、第三に対して出された幕府の命に備えて、尾張 では、義直の編纂した「神祇宝典」「類聚日本紀」等の を訂作業が行なわれました。

りは、履歴録と呼ぶべき内容になっていきました。寄」が、明治四年(一八七一)まで、「御日記」は「御日寄」が、明治四年(一八七一)まで、「御日記」は「御日忠頭書」として嘉永二年(一八四九)ころまでと、どれむほぼ幕府の終焉迄つづいています。とくに、将軍家ともほぼ幕府の終焉迄つづいています。とくに、将軍家とは、時代を追うにつれ記事が詳細となり、系譜というよは、時代を追うにつれ記事が詳細となり、系譜というよい、関歴録と呼ぶべき内容になっていきました。

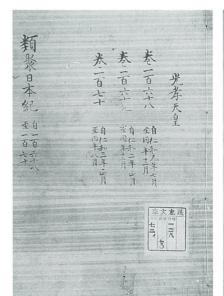
って、重要であったことを示しています。常に再確認することが、揺らぎはじめた武士の支配にと家の権威と持続性、将軍、大名に連なる武士の結束を

1/14 5/12 2/12

3/1 \ \ 3/31

類聚日本紀 174巻70冊 徳川義直編 寛政年間 稲葉通邦筆 29.5×21.2cm

「類聚日本紀」は、義直の主導した編纂書のひとつ。その内容は、神代から9世紀の光孝天皇にいたる歴代の事績を六国史(日本書紀・続日本紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録・日本三代実録)をもとに記述したもの。本書は、義直編纂の原本ではなく寛政期に稲葉通邦(尾張藩士・1744~1801)が校訂した写本。この校訂作業は、上記のように幕府の系譜編纂の際に行なわれたもの。この時、「神祇宝典」については、河村秀根(1723~92)があたっている。



衛日本紀第古 妻李三年五月妻古年上京 一章五行之上於內東賜禄有老祭已達 是日宴五行己上於內東賜禄有老祭已達 是日宴五行己上於內東賜禄有老祭已達 是日宴五行己上於內東賜禄有老祭已達 使於仟勢大神宫及七道諸社奉幣以古速 使於仟勢大神宮及七道諸社奉幣以古速 使於仟勢大神宮及七道諸社奉幣以古速



続日本紀 40巻 鎌倉時代 (13世紀) 写 (一部慶長年間補写) 縦29.9×全長531.7~1,757.4cm

前于 太上 位下波多真人余射于山、佐造正八位上標積朝 續 年 4 天之真宗豊祖父天皇 日 天皇 道 從四位下行民部大輔兼死兵衛務皇太子學臣管野朝臣真道奉 東 春 本 经 正 海 紀 第 七 確宫中子遣 適 月癸亥朔廢朝親 检 從 = 上高向 六 位 赵 上 大賢三年正月蓋慶雲三年六月 多治比 朝 臣 正 文武天皇第 亦三 大足 六 王 真 位 己 于 不 人 下 藤原 三 完 展 吕 于 北 百 陸通 官人等拜 朝 臣 粉標





続日本紀 40巻13冊

元和年間角倉素庵写

27.8×20.9cm

家康が所蔵し、後に駿河御譲本として義直に贈られた金沢文庫旧蔵の「続日本紀」(「日本書紀に続く 勅撰の正史。)と角倉平次が義直に献上した父素庵の 書写、校訂による角倉本「続日本紀」である。

この金沢文庫旧蔵の「続日本紀」は、高野山の僧頼慶 (1562~1610) の所蔵であったものを、慶長17年(1612)、伊豆山神社の別当寺般若院の僧快運から家康に献上されたものである。この時すでに巻1~10が欠けていたため不足分を五山の僧に書写させた。

巻11~40については現存最古の写本で、13世紀後半 の写と推定されている。

一方、元和7年 (1621) 頃から書物の講読や書写などに義直のもとをおとずれていた角倉素庵は、この金沢文庫本を校訂して写本を作成、さらに別本と校訂して角倉本「続日本紀」を完成した。また、この一連の作業は、正保3年 (1646) に完成した義直による編纂書のひとつ「類聚日本紀」編纂の一過程であったものとも考えられている。

#### 義直・光友の収集書に使用されている蔵書印記 (印記は原寸)







「御本」印記(甲) (33×33mm)

「御本」印記 (乙) (34×33mm)

「御本」印記 (丙) (29×29 mm)

義直の蔵書印。江戸時代には、家康の 蔵書印と誤って理解されたこともあった。 義直が譲り受けた「駿河御譲本」のほと んどと、元和年間の義直の蔵書の多くに この印記がある。現在当文庫蔵の「駿河 御譲本」で、この印記がないのは数件に すぎない。寛永年間以降の義直の蔵書で は、捺印の比率が極めて低くなり、代わ って下記の「尾陽文庫」印の比率が高くなっている。

印記は、大きさ形のよく似た2種(甲・乙)とひとまわり小さい1種(丙)の3種がある。右のように甲印のみが現存しており、獅子型の紐がついた陶製の印である。朝鮮に特注した高麗焼との説もあるが、現在は国産説の方が有力である。





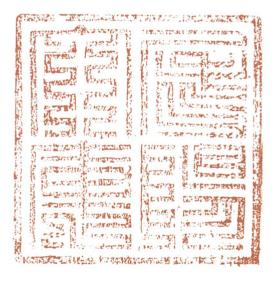
「御本」印(甲) (縦3.5×横3.5×高3.6cm) 徳川美術館蔵



「尾陽文庫」印記 A (67×67 mm)

義直の収集書にもっとも多くみられる印記である。 とくに寛永期以降の蔵書のほとんどにこの印記がある。この印記は、義直の蔵書だけに限らず、二代光 友以降の蔵書にもみられ、光友が義直の蔵書を受け 継いだ後に捺したともいわれる。しかし、義直の時 代から使用されていた可能性も否定できない。とも あれ、「尾陽文庫」の命名には、家康の「駿河文庫」 を手本とした義直の影が感じられる。

尚、駿河御譲本も含め、義直の蔵書には、ほとんど「御本」か「尾陽文庫」の印記が存在するが、光 友の蔵書では、印記のあるものは少ない。以後、歴



「尾陽文庫」印記 B (66×66 mm)

代藩主の蔵書には、蔵書印記がない方が通例のよう である。

義直の蔵書では、わずかな例外を除き、第1冊目巻頭にのみこの印記がある。光友の蔵書にある場合は、全冊の巻頭に捺されている。印記のほとんどは、左のわずかに大きめの印(A)である。右の印(B)の使用例は極めて少ないが、この場合は、第1冊巻頭に印(A)があり、第2冊目以降の巻頭に印(B)がある。

「御本」印と「尾陽文庫」印の使われ方の違いに 御文庫の蔵書の性格の変化が反映しているとも考え られる。

# 尾張藩御文庫の蔵書 その1 駿河御譲本と義直・光友の収集書

徳川黎明会から名古屋市への移管後の蔵書が三万点を越えている。蓬左文庫の蔵書は、御文庫の蔵書だけから成り立っていたわけではない。しかも、現在では、昭和二十五年、蔵書がその中核をしめていることには違いない。しかし、尾張徳川家の蔵書は、すべてがちである。もちろん、全蔵書の六割から七割が尾張徳川家の旧蔵書であり、御文庫の尾張藩御文庫の後身である蓬左文庫の蔵書は、すべて尾張藩御文庫の旧蔵書と見られ

様々な蔵書群から成立しているのである。

7収集の歴史をたどってみようと考えている。|| 今後、「蓬左」の紙面では、蓬左文庫の蔵書を蔵書群を単位に取り上げ、蓬左文庫の書

### -尾張藩御文庫-

が、御文庫の蔵書である。の中心は尾張徳川家の蔵書であり、その中核を占めるのの中心は尾張徳川家の蔵書であり、その中核を占めるの下記の図によっても明らかなように、蓬左文庫の蔵書

とくに、初代養直、二代光友の時代は、精力的に書物物倉のことである。その設立の時期は明確ではないが、歴代藩主の書物収集を中心に規模を拡大し、幕末期には、に贈られた元和年間ころといわれる。その後、御文庫は、に贈られた元和年間ころといわれる。その後、御文庫は、に贈られた元和年間ころといわれる。その後、御文庫は、に贈られた元和年間ころといわれる。その後、御文庫は、に贈られた元和年間ころという。

## 涿康の蔵書─駿河御譲本─

れている。その一つが書物の収集である。慶長一二年(一もともと好学の家康は、晩年とくに文教政策に力をい

よれば、その点数は、三六三件二八二六点(実際は三六 義直の蔵書目録に収録されている駿河御譲本の受取書に 御三家に分配された。尾張家の分には、金沢文庫旧蔵書 送られた後、五対五対三の割合で、尾張、水戸、紀州の 河文庫の蔵書は、 最高権力者の蔵書に相応しい書物が集められていた。駿 された朝鮮の優れた金属活字印刷による書物をはじめ、 沢文庫の旧蔵書、秀吉の朝鮮出兵の戦利品としてもたら 庫を営んだ。その蔵書は、家康が採訪して集めさせた金 るのは、二五七件一八七一点である。 七件二八二五点)、この内現在まで当文庫に伝えられてい が四件含まれ、名品がもっとも多く贈られたといわれる の蔵書は、林羅山によって、五一件が、江戸の将軍家に していた富士見亭文庫から、蔵書の一部を移し、駿河文 六○七)、駿府に隠居した家康は、すでに江戸城内に設立 約一万点といわれる。家康の没後、こ

# -義直の書物収集のはじまり―

収集の原点となったと思われる。とって、駿河文庫は極めて身近な存在であり、後の書物とって、駿河文庫は極めて身近な存在であり、後の書物が年期、少年期を駿府の家康のもとで過ごした義直に

寛政期に作成された目録に、「元和元年七月御買上」とい義直の書物収集の始まりは、元和元年ころとみられる

。 ← 昭和25年以降収集書 ← ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	- 名古屋市蓬左文庫蔵書 (約10万点) — — — — — — — — — — — — — — — — — — —
尾崎久弥コレクション 山田千疇旧蔵書 蟹江慶次郎旧蔵書 堀田文庫蔵書 (寄託) 雑賀重良旧蔵書 小笠原家伝書 尾州茶屋文書 名古屋市蓬左文庫収集書	<ul> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大友収集書</li> <li>・大大本・接収本</li> <li>・村習斎家講議録</li> <li>・中村習斎家講議録</li> <li>・屋敷等蔵書</li> <li>・屋敷等蔵書</li> <li>・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</li></ul>

類などであった。 の目本の歴史書、さらに辞典 も早い記録である。 元和元年(一六一五)七月は、大坂 う注記があり、これが義直の書物収集についてのもっと

○冊は現在も蓬左文庫に所蔵されている。

○冊は現在も蓬左文庫に所蔵されている。

・すでに慶長一二年(一六○七)尾張に封じられていたすでに慶長一二年(一六○七)尾張に封じられていたすでに慶長一二年(一六○七)尾張に封じられていたすでに慶長一二年(一六○七)尾張に封じられていた

#### - 義直の収集書-

新直の時代に収集された書物は、購入による漢籍が大 部分である。長崎を通してもたらされた当時中国で出版 部分である。長崎を通してもたらされた当時中国で出版 部分である。長崎を通してもたらされた当時中国で出版 書物となったものばかりである。また、和書についても 数は少ないものの、基本となる古典の収集に努めている。 表列には、すでに義直個人の蔵書収集の域を脱し、将 変利には、すでに義直個人の蔵書収集の域を脱し、将 変れていたものと言える。

触れも多彩である。とくに、種村肖水寺や角倉からの献羅山、堀杏庵、沢庵、陳元贇等々と、献上した人物の顔素庵、平次親子の一二件一二〇点、以下金地院崇伝、林っている。種村肖水寺から五四件二五六点、ついで角倉っている。種村肖水寺から五四件二五六点、ついで角倉っている。種村肖水寺から五四件二五六点、の献上本も、その数は少ないが、重要な意味を持

上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立し上本は、質量ともに優れ、現在では、それぞれに独立した。

次点の角倉は、海外貿易や河川開発等に関った商人で 大である。尾張入国後まもない義直に和漢の歴史書を講 しても知られた学者で、江戸初期を代表する文化人の一 しるなど義直の学問、編纂事業に大きな影響を与えた。 じるなど義直の学問、編纂事業に大きな影響を与えた。 である。尾張入国後まもない義直に和漢の歴史書を講 とるなど義直の学問、編纂事業に大きな影響を与えた。

る。 こ代藩主となった光友が、義直没後、その書物を引継 二代藩主となった光友が、義直没後、その書物を引継

## 御文庫の基礎の確立

が置かれ、初めて職制上専任の役職が設置された。その整備が行なわれている。万治元年 (一六五八)、書物奉行ところで、光友の時代には、様々な点で御文庫の機構

ととなっている。ととなっている。ととなっている。ととなっている。ととなっている。ととなっている。ととなっている。この書物倉に納められ、藩主の側近によって管理されるこの書物倉に納められ、藩主の側近によって管理されることとなっている。ととなっている。ととなっている。

様々な点で、基礎造りがなされたのである。 尾張藩の御文庫は、光友の時代までに、蔵書に限らず

# ·蓬左」五一号掲載記事参考文献・関係文献(順不同)

一九八五友の蔵書を中心に一」(「名古屋市博物館研究紀要」八)友の蔵書を中心に一」(「名古屋市博物館研究紀要」八)山本祐子「尾張藩「御文庫」について(一)―義直・光

(「続日本紀研究」二五四)一九八六 一義直の文治臣僚―」(「金鯱叢書」九) 一九八四―義直の文治臣僚―」(「金鯱叢書」九) 一九八四跡部佳子「徳川義直家臣団形成についての考察(七)

「続日本紀 蓬左文庫」五 一九九三 「蓬左文庫本続日本紀 解題」(八木書店刊)

一九七〇

二)一九六七 同 「徳川義直の撰述書目」上・下(「芸林」一八―一・

福井保「江戸幕府編纂物 解説編」雄松堂書店刊 一九一九三四 一九三四 川瀬一馬「駿河御譲本の研究」(「書誌学」通巻第一六号)

西村時彦「尾張敬公」名古屋開府三百年紀念会 一九一〇八三

屋叢書三編」一)一九八八『尾張徳川家系譜》解題」(名古屋市教育委員会刊「名古『尾張徳川家系譜》解題」(名古屋市教育委員会刊「名古『本田彦』 原列等を1名古屋開州三音を兼える。 一サー〇

「蓬左」第一・二四・二八・三二・四四号 一九八〇~「蓬左」第一・二四・二八・三二・四四号 一九八〇~

#### 神祇宝典



神祇宝典 10巻 9冊1帖 徳川義直編 写(正保3年序)  $32.7 \times 23.0 \,\mathrm{cm}$ 

月が費やされ と並んで、 調査をおこなっている。 意図もあ 証したもの ひとつであ いとりによって描 田神宮 祭神 H (一六四六) たとい 義直がとくに力を入れ であ の調査が寛永元年( とり、 「六国史」 その 伊 は 勢神宮、 わ 「類聚日 疑わし 内容は、 れる。 完成まで一 れ 等の 最 初の 津島神社等の 本紀」「 全国 0 神 資料によって検 ため 社を排 調査と見ら 六 + 0 た編纂物 に 由緒ある 四 车 除する 実地 義直 0 Œ. も使

なっていた角倉素庵が、 61 大判 策に影響を与えた三人が顔を揃えたことと か、 用 筆 る。 瓜と同 序文は、 の書物によく 本書には、 使 以用され じものである。 林羅 た用 奇しくも義 、似合う表紙 Ш は 当時すでに故 発直の 誰 0 直 出版事業 0 演出 意志を汲 の錦 の学問 によるも に用 と文教 司

模様を織りだした錦に

表題の文字は

祇宝典」の表紙

牡

丹、

菊

梅

唐草

が、

宮真清田

神社

の棟

表紙の写真は、

超の

編纂物のひとつ

果たしたのは、

堀杏庵であっ

杏庵の調 に残され

物を彷彿とさせる書物である 心を示すとともに、 く義直の編 かっ 義直は、 以用され、 た。 本書は様々な意味で義直とい 纂した 中国 H 本の からの輸入品という説 「御年譜」(家康の 中 古代史や 玉 文化に対する憧 神道 年 強 譜 もあ 関 に

蓬左文庫は、蔵書点検のため下記のように休館させていただきます。 期間 平成6年6月21日(火)~7月3日(日)

本書の編纂にお

いても、

その

主導的

役割

#### 名古屋市蓬左交庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001  $\mathbf{2}$  (052) 9 3 5 - 2 1 7 3

◆交 通

名古屋駅、栄より 市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行) 「新出来」下車、徒歩5分 JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分~午後5時

日 毎月曜日、第3金曜日

祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開

館、月、火休館)

特別整理期間(2週間)

年末年始(12月28日~1月4日)

閱 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。

閲覧時間 閉架図書 午前9時30分~12時

午後1時~5時

開架図書 午後9時30分~午後5時

複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム

複写などの方法により行います。 電話・郵送による申込みも可。

取扱い時間 午前9時30分~12時 午後1時~5時

30件程度の所蔵資料を随時展示。テーマ、期間、回

数は、年度により異なります。

「蓬左」第51号 ☆平成6年4月9日発行 ☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地) ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷:大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)

展